明治 20 年代、30 年代の名古屋の音楽文化と洋楽受容
―『新愛知』の音楽記事より―

Musical Culture and Reception of European Music in the Twenties and Thirties of the Meiji Era Nagoya
― On the Investigation of the News Accounts in the *Shin-Aichi* ―

小　沢　優　子
OZAWA Yūko

In the Meiji era various kinds of music were enjoyed in Nagoya. But a comprehensive study about them has been little attempted. This paper aims to clarify the actual state of musical culture and reception of european music in the twenties and thirties of the Meiji era Nagoya. By investigating the news accounts in the *Shin-Aichi* which was the main newspaper at that time Nagoya, many facts are grasped: the performance of jōruri, nō, heikyoku, yakumo-goto, minshingaku, military band, the spread of european instruments(organ, violin), and the frequently given concerts with diverse type of music. Under this circumstance european music was gradually recepted in Nagoya.

■はじめに

日本の伝統音楽や導入まもない洋楽を含め、明治期の名古屋における音楽についてはいくつかの著作や論文があるが [(1)]、全体を視野に置いた研究はまだ十分に成されているわけではなく総合的な把握には至っていない。本論文では、明治 21 年 7 月 5 日から刊行された『新愛知』（現在の『中日新聞』の前身）の記事を通して明治 20 年代、30 年代の名古屋の音楽文化と洋楽受容の状況を提示し、名古屋の音楽史記述につながる基礎的作業を試みたい。

1. 明治 20 年代、30 年代の『新愛知』

明治 21 年 7 月 4 日に廃刊となった『愛知絵入新聞』を引き継いだ形で創刊された『新愛知』は、明治 36 年には発行部数が 10 万部に達していた当時の名古屋の主要新聞である [(2)]。現在、明治 21 年 7 月から明治 31 年 3 月までの多くの部分が失われ欠号となっており、『扶桑新聞』など他紙からの補いも今後必要となるが、20 年代、30 年代の『新愛知』の紙面からは、明治 22 年に市制が施行され成立した名古屋市とその周辺の郡部での音楽受容のおおよその実態を知ることができる。

音楽記事の中で圧倒的に多いのは、富本席、千歳座、末広座、若松座、橘座、大同座などの劇場で催された浄瑠璃、常磐津、説教源氏節の興行や温習会の公演情報である。「毎晩大入り…午後

七時には木戸〆切り客を謝絶するなり」（明治 25 年 3 月 1 日から 13 日までの旭亭での竹本源太夫一座の興行）といった人気ぶりを伝える記述は枚挙にいとまがなく、また、好評の一座が劇場を移して公演を続けていく当時の興行の形態もうかがうことができる（たとえば、明治 24 年の竹本七五三太夫一座は 2 月 25 日から富本で、3 月 8 日から若松座で、3 月 13 日から橋又座で興行）。明治 35 年頃からは日露戦争を背景に芸能欄が縮小され、浄瑠璃を始めとする語り物の公演の掲載数は減るが、明治 39 年頃になると再び記事の数は増え、語り物の人気が衰えていなかったことを示している。

次いで目立つのは能楽である。東照宮、若宮神社、那古野神社での奉納能、柴田穀彦による愛観倶楽部の能楽研究会、種々の追善能、謡曲研究会、愛知県博物館の能舞台開きなど数々の事柄が取り上げられ、とりわけ、伊藤次郎左衛門や岡谷惣助ら尾張徳川家に縁のある財界人を中心とした九日会の発案によって明治 34 年 4 月に始まった那古野神社での愛知能楽会 (3) の例会は、頻繁に番組と出演者が掲載され丁寧な扱いである (4)。名古屋の能について京都のある能役者は、日露戦争後の明治 39 年 1 月の「正月の能」という記事の中でこのように語っている。

> 去年の春は満州にて修羅の巷を演じし故謡や能の沙汰にはあらざれど今年は一陽来復して三府共に盛んなり其他名古屋も本年よりは又此道栄ゆべし…名古屋は京都の次で謡曲の盛んなる地なり東京京都の能役者を金に飽かして招聘すとは、扨も執心深き哉…［明治 39 年 1 月 30 日］。
> ＊［　］内は『新愛知』の記事掲載の日付。記事の直接引用では漢字の旧字体は新字体で記してある。

このほかにも『新愛知』ではさまざまな音楽の実情が伝えられている。記事の件数、情報量が比較的多いものを以下にまとめた。

2. 弁財天の祭典、小松景和

明治 4 年の当道座の廃止後、平曲の伝統が名古屋の国風音楽講習所（後に国風音楽会と改称）によって守られてきたことは周知の通りである。国風音楽講習所名古屋支部の初代支部長をつとめた小松景和や、国風音楽講習所の年中行事である弁財天の祭典に関する記事は名古屋特有の音楽文化を知る上で興味深い。

弁財天の祭典 (5) は次のように行われている。①～⑤は門前町七ッ寺での弁財天の祭典、⑥～⑧は松山町の慈眼院での弁財天の祭典である。

① 明治 24 年 5 月 15 日　小松景和、磯谷壽加社中による平曲、琴、三味線、胡弓、並びに羽塚慈圓の雅楽等の奉納。［明治 24 年 5 月 15 日］

②明治 25 年 6 月 5 日　箏曲の奉納。番組は「吉備楽須磨春の曲高砂奥の手梅ヶ枝船の夢外数番」。［明治 25 年 6 月 4 日］

③明治 25 年 10 月 15 日　第 5 回音楽奉納会。平曲の《鱸》（澤田東一）、《敦盛最期》（加藤徳次）、《葵

ノ前》（川出眞清）、《忠度最期》（寺島花野）、《小督》（小松景和）、《紅葉》（磯谷壽加）のほか吉備楽、俗曲も番組に含まれ、尺八の兼友西園が《袖ノ露》を奏している。［明治 25 年 10 月 13 日］

④ 明治 26 年 5 月 17 日　市内の音楽家による音楽の奉納。平曲は《卒塔婆流》（澤田東一）、《竹生島詣》上（加藤徳次）、中（川出眞清）、下（寺島花野）、《海道下り》上（小松景和）、下（磯谷壽加）。そのほか愛知楽友会による雅楽と、奏者は示されていないが八雲琴、吉備楽、箏曲も奏されている。この音楽奉納の通券は小林倫祥 (6) が扱っている。［明治 26 年 5 月 14 日］

⑤ 明治 27 年 5 月 15 日　雅楽、平曲、八雲琴、吉備楽、箏曲等の奉納。［明治 27 年 5 月 13 日］

⑥明治 32 年 10 月 15 日　小松景和社中による弾琴箏曲の奉納。［明治 32 年 10 月 13 日］

⑦明治 33 年 10 月 15 日　大般若転読、大福引きの後、小松景和社中による弾琴箏曲の奉納。［明治 33 年 10 月 10 日］

⑧明治 37 年 11 月 17 日　日露戦争の戦勝記念のため、「大般若転読を執行し余興として小松勾当及び社中の箏曲、福引き等ある由」。［明治 37 年 11 月 17 日］

小松景和はこのほかに、明治 22 年 4 月 4 日に逓信管理局長の送別の饗応の席で余興に琵琶を弾奏、明治 23 年 1 月 17 日に茶屋町須佐之雄神社で箏曲を献納、明治 32 年 10 月 7 日の金城婦人会第 1 回総会で箏や胡弓の合奏をしている［明治 22 年 4 月 6 日、明治 23 年 1 月 17 日、明治 32 年 10 月 11 日］。さらに、後述の和洋混合演奏会や演芸会でも登場している。

3. 八雲琴

弁財天の祭典でも奉納された八雲琴は明治期に流行した二弦琴で、名古屋においても、東京の大岸玉琴によって設立された知音会 (7) を中心に活動が行われていた。明治 25 年 9 月 2 日には愛知県博物館で大岸玉琴が門下生を率いて演奏し、同年 12 月 18 日より知音会において大岸玉琴を招聘して毎日稽古が行われ、明治 26 年 1 月 5 日に栄町日ノ出楼で催された新年初回の合奏では男女数 10 名による弾琴吹笛。同年 2 月 2 日には熱田神宮拝殿で八雲舞と八雲琴の奏楽がなされ、2 月 5 日の熱田芙蓉楼での第 2 回温習会には 40 余名が会し傍聴人は数 100 名。明治 27 年 5 月 27 日の熱田神宮での奉納では、「菅掻、熱田振、今様、治る浪、春の調、松の齢ひ、五十鈴川、高倉山、古人今様等の数曲」が奏されている。［明治 25 年 9 月 2 日、明治 25 年 12 月 18 日、明治 26 年 1 月 7 日、明治 26 年 1 月 29 日、明治 26 年 2 月 7 日、明治 27 年 5 月 27 日］

また、知音会との関係は不明だが、西新町の神宮奉斎会愛知支部も明治 32 年 8 月 4 日の改正条約実施の祝賀祭や、明治 33 年 5 月 10 日の皇太子殿下御婚儀奉祝祭で八雲琴を奏している［明治 32 年 8 月 2 日、明治 33 年 5 月 10 日］。

4. 明清楽

江戸時代後期から明治時代にかけて日本で受容された中国の明代、清代の音楽である明清楽は、

日清戦争によって衰え、その後復活するものの勢いは取り戻せず、現在は長崎にのみ伝承されている外来音楽である。名古屋には天保 6（1835）年頃に伝来したと言われるが [8]、明治期の受容については明確ではなく、明治 23 年 9 月から明治 31 年 2 月まで刊行され全国各地の音楽状況も扱っている『音楽雑誌』には、名古屋の明清楽については合奏会が 1 件、音楽会の中での奏楽が 5 件取り上げられているにすぎない。一方、『新愛知』での明清楽関連の記事は多く、音楽会の中での奏楽のほか、単独の催しについては次の 21 件が確認された。会場は、①⑧⑪⑯⑲⑳㉑以外は愛知県博物館である [9]。②③⑤⑦⑫⑯⑰には演奏曲目が記載されている。

① 明治 22 年 11 月 23 日と 24 日　故徳川義宣公の例祭で明清楽の合奏　新出来町の徳川邸
［明治 22 年 11 月 22 日］
② 明治 24 年 9 月 23 日　清風会員による明清楽の合奏　［明治 24 年 9 月 23 日］
③ 明治 25 年 4 月 23 日　杉風社による明清楽の合奏　［明治 25 年 4 月 20 日］
④ 明治 25 年 5 月 30 日　伊藤竹女の催しによる明清楽の合奏　［明治 25 年 5 月 29 日］
⑤ 明治 25 年 10 月 23 日 野村昌重の発起による明清楽の合奏研究会　［明治 25 年 10 月 15 日］
⑥ 明治 25 年 11 月 23 日　水野知方の催しによる明清楽の合奏研究会　［明治 25 年 11 月 19 日］
⑦ 明治 26 年 1 月 22 日　清風会の催しによる清楽合奏　300 余名の来会者
弾琴者は富田渓蓮や飯島思月を含め 50 余名　［明治 26 年 1 月 21 日、24 日］
⑧ 明治 26 年 2 月 26 日　富田渓蓮による清楽研究会　西魚町の百春楼　［明治 26 年 2 月 26 日］
⑨ 明治 26 年 5 月 7 日　富田渓蓮の送別会で門人が清楽合奏　［明治 26 年 5 月 7 日］
⑩ 明治 26 年 5 月 21 日　杉風社による明清楽研究会　［明治 26 年 5 月 18 日］
⑪ 明治 27 年 4 月 21 日　若林松蓮や加島松琴らを会主とする清楽合奏　南小川町の常徳寺
［明治 27 年 4 月 20 日］
⑫ 明治 27 年 5 月 6 日　清楽合奏のほか余興に須磨琴等　［明治 27 年 5 月 4 日］
⑬ 明治 30 年 5 月 2 日　渓風会の催しによる明清楽の合奏　［明治 30 年 5 月 2 日］
⑭ 明治 31 年 5 月 15 日　野村昌重を会主とする明清楽研究会　［明治 31 年 5 月 11 日］
⑮ 明治 31 年 6 月 19 日　太田廉道を会主とする明清楽研究会　［明治 31 年 6 月 14 日］
⑯ 明治 32 年 4 月 23 日　渓風社員による清楽合奏　東陽舘　［明治 32 年 4 月 19 日］
⑰ 明治 32 年 10 月 17 日　清楽研究会並びに須磨琴等　［明治 32 年 10 月 14 日］
⑱ 明治 33 年 4 月 15 日　渓風社員による清楽合奏　［明治 33 年 4 月 15 日］
⑲ 明治 33 年 10 月 28 日　渓風社員による清楽研究会　若宮神社内威稜舘
［明治 33 年 10 月 24 日］
⑳ 明治 34 年 5 月 5 日　渓風社員による清楽　東陽舘　［明治 34 年 5 月 2 日］
㉑明治 39 年 5 月 6 日　明清楽合奏　七ツ寺境内の善光寺　［明治 39 年 5 月 6 日］

楽器広告の中でも明清楽は時々登場している。たとえば、宮町の星野文星堂の楽器広告には「オルガン、手風琴、鐵心琴、吹風琴、陽琴、銀笛、明笛、短笛、尺八」[明治 36 年 8 月 16 日]、下長者町の浅田屋の楽器広告には「三味線、月琴、象牙撥」[明治 34 年 12 月 14 日]。また、ヴァイオリン製作の鈴木政吉による〈鈴木吹奏琴〉の広告では、「軍歌、唱歌、清楽、端唄、はやり唄等自由に独奏合奏することを得るなり」[明治 32 年 3 月 9 日] (10)、三輪オルガン製造所による〈改良吹風琴〉の広告には「…手風琴、オルガン、ヴワイオリン、銀笛、明笛、月琴、三味線等の諸楽器と合奏して甚だ可なり殊に此改良の吹風琴には笛孔に清楽の音階（上尺工）をも記しあれば明清楽を学ぶに至便なり」[明治 32 年 3 月 28 日] とあり、日清戦争後の明治 30 年代に入っても明清楽は名古屋でかなり愛好されていた。

5. 軍楽隊

洋楽の導入と普及に大きな役割を果たしたのが軍楽隊である。名古屋では、明治 21 年に名古屋鎮台に代わって設置された第三師団に大正元年軍楽隊が創設され、大正 4 年から鶴舞公園奏楽堂で継続的に演奏会が行われているが、それに先立つ明治 43 年、第十回関西府県連合共進会の 90 日間の会期中、海軍軍楽隊の楽手経験者らによる吹奏楽の楽隊が鶴舞公園奏楽堂で本格的な洋楽を演奏し (11)、さらにさかのぼると、明治 30 年代に民間の軍楽隊が活発に活動していたことが『新愛知』で確認される。

明治 30 年代に名古屋とその周辺で活動していた軍楽隊は、一宮軍楽会、金城軍楽隊、中京軍楽会である (12)。

中島郡一宮町の一宮軍楽会は、「廿七八年の戦役に際し特に犒軍せし為め今回大日本赤十字社より三組杯を下附されしは同会の大名誉と云ふべし因に同会は音楽士の結合せし者にて斬新なる奏曲数百種あり……同会は営利的にあらざるを以て遠近を論ぜず無報酬にて招聘に応ずると云へり」という軍楽会で、明治 32 年 8 月 4 日、改正条約実施の祝賀会が一宮町の清華園で開かれた時に奏楽し、明治 33 年 2 月 10 日には、一宮高等尋常女学校（女学校ではなく小学校であろう）での御真影奉戴式に際し一宮駅から学校まで御真影が運ばれる間軍楽を演奏している[明治 30 年 4 月 21 日、明治 32 年 8 月 6 日、明治 33 年 2 月 13 日]。

金城軍楽隊は、『音楽雑誌』第 53 号（明治 28 年 9 月）の「名古屋通信」によると、名古屋の有志家が千円の資金を募って明治 28 年 1 月に組織した遊楽慈善のための軍楽隊である (13)。『新愛知』で見られる金城軍楽隊の活動の場は次のように多岐に渡っている。

① 明治 30 年 5 月 15 日　御園座の落成式。　[明治 30 年 5 月 16 日]

② 明治 31 年 4 月 10 日　渥美郡田原町龍門寺での土屋少将の歓迎会。四百余名の来会者があり「発会より閉会に至る迄絶へず煙火及び金城軍楽隊の奏楽あり杯酒漸くめぐりて耳熱するや兵士及び青年は一同起立して洋々たる軍楽に和して四百余州を歌ふなど盛況殆んど無比なりしと云ふ」ほどであった。[明治 31 年 4 月 13 日]

③ 明治 32 年 8 月 20 日　海西郡飛鳥尋常小学校増築竣工式。［明治 32 年 8 月 20 日］

④ 明治 33 年 4 月 8 日　東陽舘 (14) での名古屋市南部会親睦会で君が代を吹奏。［明治 33 年 4 月 10 日］

⑤ 明治 33 年 5 月 10 日　皇太子殿下御婚礼の奉祝会。会場は元警察署跡の空地で、一千余名の人が集まった。式は金城軍楽隊の君が代で開始。［明治 33 年 5 月 12 日］

⑥ 明治 33 年 5 月 18 日　名古屋市西部会の春季総会。「…会員の来集せしもの百八十余名午前八時堀川納屋橋に集合し数艘の平田船に分乗して金城軍楽隊の奏楽を合図に出帆…」。［明治 33 年 5 月 22 日］

一方、中京軍楽会は株式会社として組織され、軍楽生徒五十名を募集する大所帯だった［明治 32 年 3 月 30 日］。楽長の内田登三郎の無礼で軽卒な振る舞いを報じた記事から、事務所は南大津町の愛知簿記学校内にあったことがわかる［明治 32 年 8 月 1 日］。

このほか、楽隊の名は記されていないが、明治 30 年 5 月 27 日の第三回愛知五二回品評会、明治 31 年 4 月末まで催された第四回東海五県連合共進会の閉会式、明治 33 年 5 月 23 日の笹島駅プラットホームでの皇太子殿下と妃殿下の送迎、明治 33 年 10 月 20 日の愛知郡長送迎会、明治 34 年 1 月 5 日の葉栗郡黒田町での従軍紀念碑除幕式、明治 35 年 3 月の愛知物産品評会、明治 36 年 9 月 14 日の第五回内国勧業博覧会名古屋出品協会の懇親会、明治 39 年 4 月 15 日の桑名町での日露戦争出征軍人のための凱旋祝賀会など、数多くの行事や式典で軍楽が演奏されている［明治 30 年 5 月 27 日、明治 31 年 11 月 1 日、明治 33 年 5 月 25 日、明治 33 年 10 月 21 日、明治 34 年 1 月 8 日、明治 35 年 3 月 27 日、明治 36 年 9 月 16 日、明治 39 年 4 月 14 日］。

このような吹奏楽による楽隊の活動が活発であったことは、明治 30 年代の楽器広告からもうかがうことができる。ヴァイオリン製作の鈴木政吉は自社のヴァイオリンのほかに楽隊用の楽器各種を扱い［明治 33 年 5 月 2 日］、雅楽器、琴、三弦、明清楽器、能楽器を製作している袋町の小林倫祥楽器本店はイギリス、アメリカから直輸入した戦勝祝賀用の軍楽隊諸楽器六人前一揃えを三十円以上で売り出し［明治 38 年 8 月 26 日］、能楽、雅楽、三弦、清楽の楽器を扱う袋町の中惣楽器店も戦勝祝賀用楽隊楽器を一式二十五円ほどで広告に載せている［明治 38 年 4 月 2 日］(15)。

ところで、第三師団は明治 27 年 11 月 6 日の招魂祭や明治 39 年 2 月 11 日の凱旋慰労会のために大阪から軍楽隊（第四師団軍楽隊）を招聘し、そのほかたびたび行われる招魂祭や軍旗祭、祈念祭、日露戦争勝利を祝う凱旋祝賀会等において楽隊による奏楽や君が代の吹奏をおこなっている［明治 27 年 11 月 3 日、明治 33 年 4 月 5 日、明治 33 年 5 月 5 日、明治 34 年 5 月 3 日、明治 35 年 5 月 8 日、明治 36 年 3 月 10 日、明治 36 年 5 月 2 日、明治 39 年 2 月 13 日、明治 39 年 3 月 11 日］。どのような楽手が奏楽していたのかは不明だが、喇叭手はいたようで、歩兵第 66 連隊で喇叭の専業者の検閲が行われ［明治 33 年 11 月 29 日］、明治 39 年 5 月 12 日に北練兵場で行われた日露戦争凱旋観兵式では「嚠喨たる喇叭は四方より吹奏せられて」いる［明治 39 年 5 月 13 日］。

6. オルガン、ヴァイオリン

名古屋市の小学校に西洋の楽器が備えられたのは、明治 18 年秋に園町小学校にオルガンが購入されたのが嚆矢であり、このオルガンを模して野村辨造、鈴木景儔の 2 人がオルガンを製作したのが名古屋市におけるオルガン製作の始まりだという [16]。『新愛知』でオルガンに関する記述が始めて見られるのは明治 21 年末である。

> メソヂスト教会にては近頃会員一同の奮発により新たに横浜ドーリング商会より一基風琴を買求められしが右は米国ボストン府ゼ、スミス、アメリカン、オルガン会社の製造に係り特に日本国の風土をも測りて格別に製造せし物の由にて大津町広小路に上る会堂に仮に備付けられたるがその価は百三十余円なりとか… ［明治 21 年 12 月 26 日］

翌年の明治 22 年には東片端町の婦人学会が、「生徒欠員あり四十名募集す　教授科目　英語編物西洋家礼洋服裁縫英語唱歌ヲルガン　毎日三時　教授束脩五十銭月時銭十五銭ヲルガンは別に二十五銭」という生徒募集広告を掲載し［明治 22 年 1 月 6 日］、本町の加藤直之が武平町にオルガン夜学校を設立し元師範学校教師飯沼一雄を教師として開校する旨を願い出ている［明治 22 年 11 月 27 日］。また、西春日井郡下小田井村の資産家川島松次郎は二杁小学校にオルガンを寄付することを考え、「その楽器は名古屋製は甚だ不出来なれば遠州製の四十七円位のものにする由」という［明治 22 年 6 月 28 日］。

「甚だ不出来」と言われた名古屋製オルガンだが、駿河町の三輪オルガン製造所のオルガンはすぐれていたようである。

> 三輪オルガン製造所にて製造するものは米国製のものと比較試験を行ひたるに米国製に優る所あるも劣ることなく寒暖に依って音調に狂ひを生じるが如き虞れは毫もなく而してその価は米国製に比して殆ど半額ほど低廉なればとて… ［明治 26 年 2 月 9 日］

三輪オルガン製造所が明治 18 年に創業され、オルガン以外の楽器の販売も行っていたことは、「オルガン　ピアノ　手風琴　ヴヴイヲリン　弊社創業七周年祝意ノ為本年中一割引　オルガン修繕同一割引　オルガン保険」という広告からわかる［明治 25 年 4 月 5 日］。

オルガンの普及を伝える記事はいくつかあり、たとえば、渥美郡豊橋町でオルガンとヴァイオリンの講習会が開かれ［明治 25 年 11 月 8 日］、渥美郡田原小学校で豊橋町の唱歌講師伊藤俊道を招いて 10 日間オルガンの伝習がなされ［明治 26 年 1 月 11 日］、東外堀町の清流女学校 [17] の新築落成式や卒業式でオルガンが弾奏されている［明治 33 年 12 月 19 日、明治 38 年 3 月 29 日］。

西洋の楽器の中でオルガンとともに早くから普及したヴァイオリンについては鈴木政吉関連の記事がもちろん多い。楽器広告やヴァイオリン製作の伝習生募集の広告のほか、鈴木政吉の業績を綴ったかなり長文の記事「本邦に於けるヴァイオリン」［明治 34 年 2 月 2 日］、浜松で催された第二回

東海実業区五県連合五二会品評会での進歩銀牌の受賞［明治 32 年 8 月 13 日］、中流以上の婦人で組織された金城婦人会第六回総会でのヴァイオリンの奏楽［明治 35 年 6 月 30 日］、第五回内国博覧会での天皇、皇后両陛下のヴァイオリンの御買上［明治 36 年 5 月 15 日］、同博覧会名古屋出品協会が催す大園遊会へのヴァイオリンの寄贈［明治 36 年 9 月 9 日］、第七高等小学校と東新尋常小学校へのヴァイオリンの寄付［明治 37 年 12 月 25 日、12 月 27 日］などである。また、名古屋には日露戦争のロシア人俘虜収容所が下茶屋町の東別院や門前町の西別院など数カ所に設けられているが、鈴木政吉が収容所に寄付した 2 挺のヴァイオリンを俘虜一同が喜び、2 人の兵卒の奏楽に合わせて舞踏を楽しんでいる［明治 37 年 12 月 8 日］。

オルガンの製造は日露戦争の開戦当時学校の経費節減の影響を受けて多少打撃を受けたが明治 38 年の上半期には需要が回復、ヴァイオリンは教育上の需要が多く漸次隆盛となっているが、日露戦争後、名古屋市製造の西洋楽器は漸次売れ行きが減り、明治 39 年 3 月以降はますます不況に陥ったという［明治 38 年 10 月 13 日、明治 39 年 6 月 23 日］。

7. 音楽会、演芸会

(1) 音楽会

a. 愛知音楽会

導入まもない洋楽を始め多種類のジャンルの音楽を揃えたプログラムによる組織的な音楽会は、名古屋ではおそらく愛知音楽会が最初のものであろう。『新修名古屋市史』の年表によると、明治 22 年 11 月 23 日に「愛知音楽会第一回演習会開催」とある [18]。『新愛知』に掲載されている次の広告からも成立は明治 22 年 11 月頃であろう。

> 本会研究員　男子部廿五名　女子部廿五名　増員候ニ付有志ノ諸君ハ来十二月五日迄ニ御申込アランヲ乞フ　名古屋市武平町廿七番戸　明治廿二年十一月　愛知音楽会　　［明治 22 年 11 月 30 日］

さらに、第 3 回、第 4 回、第 5 回、第 6 回大演習会の模様を『新愛知』は次のように伝えている。

第 3 回大演習会　明治 23 年 10 月 17 日（神嘗祭）　市役所内議事堂

「今春開きたる演習会より番組等余程沢山なる模様にて」という大演習会で、「来会員は議事堂に充満し中々の盛会」であった。詳細に記されているプログラムのおおよその内容は、唱歌と軍歌（市内 9 校の小学校の生徒、愛知音楽会研究員）、尺八（日比野楽堂）、明清楽（杉風社員）、箏と三味線と尺八の合奏（小松景和ほか数名）、尺八と箏の合奏（兼友西園、寺島花野、小林ゆき）、オルガン独奏（岩城寛）、箏（小松景和ほか数名）、二重唱と四重唱による唱歌、ピアノ独奏、オルガン独奏（ホーレスト令嬢ら 3 名の外国人）。　［明治 23 年 10 月 16 日、17 日、19 日］

第 4 回大演習会　明治 24 年 3 月 21 日（春季皇霊祭）　市役所内議事堂

「…欧州楽雅楽箏曲及明清楽等にて欧米人数名小松磯貝西園などの各名手市内小学校生徒も出席するよしなれば相変わらす一大盛会ならん」。　［明治 24 年 10 月 15 日］

第 5 回大演習会　明治 24 年 10 月 17 日　水主町の金城舘

「欧州楽は云ふも更なり吉備楽明清楽及箏胡弓尺八等の合奏もありて市内各学校生徒も出席するよし」。　［明治 24 年 10 月 15 日］

第 6 回大演習会　明治 25 年 11 月 23 日　愛知県博物館

第 3 回と同様、プログラムは詳細に記されている。そのおおまかな内容は、唱歌（市内 6 校の小学校の生徒、愛知音楽会研究員）、清楽（清風会員）、尺八（日比野楽堂）、ヴァイオリン（松下要）、箏と尺八（小松景和と山田和道）、箏（小松景和その他）、尺八連管（岡田魯山、山田和道）、箏、胡弓、三絃（小松景和その他）、尺八と箏（兼友西園、寺島花野、小林ゆき）、ピアノ独奏、複音唱歌（ダンフォルス令嬢ら 3 名の外国人）。　［明治 25 年 11 月 23 日］

b. 名古屋音楽倶楽部

名古屋音楽倶楽部は、名古屋市の知名人数十名の賛同を得て、「内外音楽の正雅善良なる者を講究し斯道の改良発達を図らん目的」で明治 32 年 12 月に設けられた組織である。明治 33 年 2 月 5 日に明治舘で行われた発会式では、片野東四郎 (19) の開会の言葉や名古屋高等女学校の甫守謹吾校長の演説とともに音楽が演奏され、盛会を極めている。その後の活動については明らかではないが、明治 34 年 11 月 23 日に七ツ寺境内の明治舘で「和漢洋合同演奏大会」を催している。曲目は、「八雲琴、雅楽、一弦琴、欧州楽、尺八、清楽、琴曲、唱歌、西洋人バイオリン独奏、英語唱歌独吟、軍楽、長唄、仏教唱歌」である。　［明治 32 年 12 月 8 日、明治 33 年 2 月 7 日、明治 34 年 11 月 22 日、11 月 23 日］

c. 明治音楽会

明治音楽会は、後に東洋音楽学校を創設する鈴木米次郎ら東京音楽学校の卒業生によって設立された演奏会組織で、明治 31 年 1 月 22 日に東京、神田の青年会館で第 1 回演奏会が開かれている (20)。翌年の明治 32 年 8 月 9 日、名古屋の御園座で、「音楽の普及発達を期し我国に流布せる俗曲を改良する」を目的としてその地方演奏会が催されている。名古屋教育協会の発起により、当日は「徳川侯爵、沖知事、仙波参謀長、西川代議士、志水市長、岡部助役、伊藤、関戸、奥田、吉田等の豪商連を始め通常、特別両会員等にて満員となり静粛の間に散会せり」という。2 日後の 8 月 11 日には岐阜市の高等小学校で行われ、およそ五百余名の聴衆を集めている。　［明治 32 年 8 月 3 日、8 日、11 日、13 日］

2 年後の明治 34 年 8 月 3 日にも明治音楽会は名古屋で開かれている。会場は東陽舘。入場券の

交付所は名古屋通信社、袋町の小林倫祥、東門前町の鈴木政吉である。「入場者は成るべく礼服若しくは羽織丈けにても着用せられたき希望の由」というので、前回同様、名古屋の名士が列席する音楽会だったようである。プログラムを以下に示した。和洋混合だが、洋楽の要素が多い。

第一部（一）欧州管弦楽歌戯の序（二）バイオリン連奏シンホニー（三）独唱歌月の少女（四）マンドリン独奏和夫恋（五）雅楽催馬楽、伊勢海（六）尺八三弦合奏安宅

第二部（一）欧州管弦楽夜会の曲（二）第三箏尺八合奏四季の眺（三）雅楽管東合歓宴（四）欧州管絃楽リンデンボルガ（五）ピヤノ、バイオリン三絃合奏色□（六）欧州管弦楽攻城ガロッピ　［明治 34 年 7 月 31 日、8 月 3 日］

d. 慈善音楽会

明治時代に支援や救護を目的とした慈善音楽会は多く、その役割は大きかった[21]。名古屋でも次のようなさまざまな慈善音楽会があり、明治舘、東陽舘、明治 30 年に開館した御園座などさまざまな会場で催されていた。

① 明治 25 年 6 月 15 日　名古屋婦人会の発起　メソジスト教会　［明治 25 年 6 月 14 日］
② 明治 27 年 6 月 17 日　愛知育児院のため　袋町の医王寺　［明治 27 年 6 月 15 日］
③ 明治 30 年 4 月 11 日　第四回慈善音楽会　明治舘　［明治 30 年 4 月 11 日］
④ 明治 31 年 5 月 1 日　第六回慈善音楽会　明治舘　［明治 31 年 4 月 2 日］
⑤ 明治 32 年 11 月 12 日　第七回慈善音楽会　東陽舘　［明治 32 年 11 月 11 日］
⑥ 明治 33 年 4 月 21 日　第八回慈善音楽会　明治舘　［明治 33 年 4 月 21 日］
⑦ 明治 33 年 7 月 20 日、21 日　岡山孤児院のため　御園座　［明治 33 年 7 月 18 日、20 日］
⑧ 明治 34 年 10 月 27 日　金城婦人会　東陽舘　［明治 34 年 10 月 26 日］＊広告のみ
⑨ 明治 35 年 2 月 15 日　足尾鉱毒被害民救済及び凍死軍人遺族扶助のため　名古屋婦人矯風会の主催　東陽舘　［明治 35 年 2 月 14 日、26 日］
⑩ 明治 35 年 9 月 14 日　鳥島罹災者遺族救護のため　仏教婦人会と名古屋音楽倶楽部の主催　東陽舘　［明治 35 年 9 月 11 日、12 日、14 日、20 日］
⑪ 明治 35 年 10 月 16 日　岐阜県の濃飛育児院のため　明治舘　［明治 10 月 12 日、16 日］
⑫ 明治 36 年 6 月 20 日　東橘町私立盲唖学校のため　市内在住の有力家たちの発起　東陽舘　［明治 36 年 6 月 17 日、19 日、21 日］
⑬ 明治 36 年 9 月 12 日、13 日、14 日　東京の女子実学園と日本力行社のため　御園座　［明治 36 年 8 月 7 日、19 日、9 月 11 日、12 日、13 日、15 日］
⑭ 明治 37 年 11 月 10 日、11 日、12 日　岡山孤児院のため　名古屋婦人有志者の主催　御園座　［明治 37 年 11 月 3 日、8 日］
⑮ 明治 38 年 2 月 11 日　出征軍人の家族救護のため　熱田の円通寺　［明治 38 年 2 月 9 日］
⑯ 明治 39 年 9 月 6 日　愛知育児院及び名古屋盲唖学校のため　御園座　［明治 39 年 9 月 5 日］
⑰明治 39 年 10 月 4 日、5 日　大阪博愛社孤児院のため　御園座　［明治 39 年 10 月 3 日］

曲目やジャンルが記されているのは、②③④⑤⑥⑨⑩⑪⑬⑰で、②を除き和洋混合のプログラムである。たとえば、⑩は欧州楽、八雲琴、箏曲、尺八、雅楽、清楽、須磨琴、長唄等、⑪は八雲琴、遊戯唱歌、独唱、須磨琴、箏曲、合唱、尺八、清楽、長唄、詩吟、剣舞、ヴァイオリン独奏、オルガン独奏等である。明治 28 年に設立された名古屋音楽連合会による一連の慈善音楽会であろう③～⑥の慈善音楽会は、邦楽とともにヴァイオリン独奏、ヴァイオリン合奏、ヴァイオリンとフルートの合奏、吹奏楽を含むプログラムにより、④の第六回では金城軍楽隊の会員が《君が代》、《ボレロ》、《箏曲六段》を演奏している [22]。⑬は、「演奏曲目は何れも高雅清麗の者を選び一方此美挙を貫徹すると同時に他方に於て斯道研究に貢献する所あらんとなり」という力の入った音楽会である。名古屋の演奏家とともに東京のピアニスト高折宮次らも出演し、ピアノ独奏、ピアノ連弾、ヴァイオリンとピアノの合奏などピアノによる曲目が目を引き、その一方で国風音楽会の箏曲合奏や、後に大正琴を考案する森田吾郎の清笛独奏が並べられているのも興味深い。⑯は「宮内省楽部の音楽師十一名並に同省御雇外国教師ウィルヘルムドウブラフウシッテ氏等の名家に懇請して」開催された演奏会である [23]。

慈善音楽会も財界人や音楽関係者らによって後援されていることが多く、⑦は「伊藤次郎左衛門、神野金之助、鈴木摠兵衛等の紳士豪商三十余名の賛成を得て」開かれ、⑫は名古屋高等女学校長の甫守謹吾、鈴木政吉、小林倫祥ら 24 人が発起人となり、当日は「徳川侯爵夫人、大島師団長、深町参事官、藍田控訴院長、藤堂検事長、山口旅団長等の夫人令嬢を始め島村参謀長…其他紳士貴婦人等数百名」が来会している。

e. 学校の音楽会

大正時代に盛んになる学校での奏楽や音楽会の始まりは明治 30 年代末頃だったようである。明治 39 年 10 月 30 日には愛知県第一師範学校の学生による音楽会が講堂で開かれ、附属小学校の生徒の唱歌の後、男子生徒のマーチ、女子学生の唱歌があり、続いて生徒並びに有志による唱歌、オルガン弾奏、ピアノ合奏等が披露された［明治 39 年 10 月 31 日］。同年、12 月 3 日には私立金城女学校で文芸奏演会が催され、対話や体操のほかに生徒のオルガン合奏、唱歌という内容であった［明治 39 年 11 月 30 日］。

(2) 演芸会

種々の音楽や芸から成る演芸会の記事は明治 38 年と明治 39 年に 11 件あり、そのすべてが御園座を会場とした慈善演芸会である。プログラムは剣舞、喜劇、舞踊、落語、手おどり、活動写真、蓄音器、浄瑠璃、常磐津、清元、新内、長唄、箏曲、薩摩琵琶、胡弓、八雲琴、ヴァイオリンやピアノの独奏、合奏などを組み合わせたもので、和洋混合音楽会以上に雑多である。しかし、中には本格的な奏楽が含まれている演芸会もある。明治 39 年 6 月 17 日の慈善演芸会は次のようなプログラムである。

蓄音器「式三番叟」 八雲琴「振放曲、御栄曲」 箏曲「常世の曲」 明清楽「平板調、四皮調」 箏曲「里の暁」 八雲琴「浦分衣、天御絃」 ヴァイオリン、セロ、ピアノ合奏「ミヌエット」 箏曲「照君」 浄瑠璃「ひらかな盛衰記」 舞踊「三ツ浦子守」長唄「鞘当」 舞「四季のたのしみ」 独唱「ゼ、デー、イズ、ダン」 浄瑠璃「傾城反魂香」 舞踊「□松風」 箏曲「□水」 ヴァイオリン独奏「タンホイゼル」 舞踊「花かたみ」 箏曲「松の栄」 舞踊「釣女」同楽（蓄音器）「衣更」 舞踊「旅□□」 ヴァイオリン、ビオラ、セロ三部合奏「コ□イロン」「君が代」
［明治 39 年 6 月 17 日］ ＊□は判読不明

明清楽、八雲琴、箏曲、浄瑠璃、長唄のほか、ヴァイオリンとヴィオラとチェロの合奏やヴァイオリン独奏によるワーグナーの《タンホイザー》を含むこの演芸会では、中京音楽院の村岡祥太郎がヴァイオリンを演奏していたようである［明治 39 年 6 月 14 日］。中京音楽院は、前年の広告によると、「ヴァイオリン、ヴィオラ、セロ、ピアノ、オルガン、唱歌楽典、和声学、作曲学等」を教授する音楽院で、住所は鈴木政吉のヴァイオリン工場のある東新道町 (24)。申込先は音楽院、または東門前町の鈴木政吉方である［明治 38 年 4 月 17 日］。鈴木政吉が関わっていたであろうこの中京音楽院の教師として広告に名前が記載されているのが村岡祥太郎である［明治 38 年 9 月 2 日］。演芸会では、村岡とともに中京音楽院の関係者がヴィオラやチェロ、ピアノを弾いていたのかもしれない。

このほか、小松景和が社中を率いて明治 39 年 5 月 27 日の慈善演芸会に出演し［明治 39 年 5 月 26 日、27 日］、箏曲の寺島花野が明治 39 年 2 月 25 日と 4 月 15 日の慈善演芸会に出演している［明治 39 年 2 月 21 日、4 月 12 日］。演芸会といえども和洋混合音楽会と変わらない顔ぶれを揃えることがあったのである。

ところで、『新愛知』では蓄音器の広告が明治 36 年頃から多くなり、明治 39 年には頻繁に登場するが、演芸会での蓄音器の使用もまた日露戦争後の蓄音器の普及を示すものとなっている。

結び

『新愛知』には上述のほかに唱歌、薩摩琵琶、吉備楽、熱田神宮や東照宮の雅楽、さまざまな集会や会合での奏楽等に関する記事があり、明治 20 年代、30 年代の名古屋の音楽の営みが多彩であったこと、また、そのような中でヴァイオリン、オルガン、楽隊による吹奏楽が奏でられ洋楽が少しづつ受容され始めていたことを伝えている。地元の名士、教育関係者、音楽関係者によって後援されていた和洋混合音楽会や演芸会では、その多様な楽曲と演奏者が一堂に会し、名古屋の音楽界の縮図といった趣である。明治 39 年 11 月には『中日新聞』のもう一つの前身である『名古屋新聞』が創刊され、『新愛知』と並ぶ名古屋の主要新聞となっていく。明治 40 年代以降については、『新愛知』『名古屋新聞』両紙の調査、分析によって名古屋の音楽文化の変化と洋楽受容の進展はより正確に把握することができるであろう。

註

(1) 飯塚恵理人『近代能楽史の研究―東海地域を中心に』（大河書房、2009 年）や、井上さつき『日本のヴァイオリン王―鈴木政吉の生涯と幻の名器』（中央公論出版社、2014 年）など。

(2)『新修名古屋市史第五巻』（名古屋市、2000 年）、863 頁。

(3) 飯塚恵理人「明治期の名古屋能楽界」『近代能楽史の研究』、117 頁。

(4) 第 1 回、第 3 回、第 8 回、第 9 回、第 10 回、第 11 回、第 13 回、第 14 回、第 17 回、第 20 回、第 25 回、第 28 回、第 29 回の例会が掲載されている。

(5)〈弁財天の祭典〉〈弁財天祭典〉〈弁財天例祭〉〈弁財天の祭礼〉など、新聞での呼称はさまざまである。

(6) 雅楽器製作の小林倫祥。小林は東照宮大祭の舞楽にも参加しており、明治 35 年 5 月 23 日には鉦鼓を演奏し［明治 35 年 5 月 23 日］、明治 36 年 5 月 12 日には太鼓や笙の演奏だけでなく《貴徳》の舞も担っている［明治 36 年 5 月 12 日］。

(7)『音楽雑誌』第 29 号（明治 26 年 2 月）の「名古屋通信」で、知音会の会員が増加したことが記されている。

(8) 塚原康子『19 世紀における西洋音楽の受容』（多賀出版、1993 年）、271 頁、280 頁。

(9) 明治 16 年に名古屋博物館が県に移管され、愛知県博物館となった。前述の愛知県博物館能舞台開きは明治 27 年のことである。

(10)〈鈴木吹風琴〉については広告だけでなく記事も掲載されている。「…鈴木政吉氏の発明にして目下専売特許の出願中なる……学生が学科として日々教授を受けし唱歌を自宅に於いて復習するの最高楽器なり定価は六十銭より一円十銭迄の四種なり」［明治 32 年 3 月 29 日］。

(11) 小沢優子「明治 40 年代の名古屋の洋楽受容―『名古屋新聞』の奏楽記事を中心に―」『愛知県立芸術大学紀要 No.42』（2013 年）、138-139 頁。

(12)『音楽雑誌』第 50 号（明治 28 年 1 月）の「楽隊の組織」、第 52 号（明治 28 年 8 月）の「関西地方の音楽隊」によると、日清戦争によって各府県の有志者が楽隊の組織を企て、明治 27 年秋からわずか 1 年の間に横浜、大阪、神戸、姫路、奈良、京都、和歌山、名古屋などで音楽隊が新設されたという。『新愛知』の明治 28 年、29 年の大部分が失われているのが惜しまれる。

(13) 理事長、理事、楽長のほかに記されている 14 名の楽生の中に雅楽の六世恒川弥太郎の次男で後に九世を継いだ恒川兼蔵の名が見られる。

(14) 明清楽の奏楽の場にもなっていた東陽舘は、明治 30 年に前津小林に建てられたもので、明治 32 年には大広間も完成され、宴会のほか浄瑠璃や謡曲の会場、洋楽の演奏会場としても使われていた。

(15) 明治 37 年、38 年には、日露戦争の九連城占領、旅順陥落、奉天陥落を祝う各地の祝賀会で楽隊の奏楽が行われている［明治 37 年 5 月 5 日、明治 37 年 5 月 10 日、明治 37 年 8 月 17 日、明治 37 年 8 月 21 日、明治 38 年 3 月 18 日］。楽隊用の楽器の需要は高かったであろう。

(16) 名古屋市役所『名古屋市史　風俗編』（名古屋市、1915 年）、244 頁。

(17) 清流女学校は明治 21 年 8 月に設立されたメソジスト系の女学校で、大正 9 年に廃校になっている。『名古屋教育史Ⅰ　近代教育の成立と展開〈明治期～大正中期〉』（名古屋市教育委員会、2015 年）、154 頁。

(18)『新修名古屋市史第十巻　年表・索引』（名古屋市、2001 年）、124 頁。

(19) 県会議員を務めたこともある書籍販売業の片野東四郎だろう。『新修名古屋市史第五巻』、120 頁。

(20) 東京音楽大学創立百年記念誌刊行委員会編『音楽教育の礎―鈴木米次郎と東洋音楽学校』（春秋社、2007 年）、66-67 頁。

(21) 竹中享『明治のワーグナー・ブーム―近代日本の音楽移転』（中央公論新社、2016 年）、247-248 頁。

(22)『音楽雑誌』第 54 号（明治 28 年 10 月）、第 55 号（明治 28 年 12 月）、第 58 号（明治 29 年 5 月）、第 74 号（明治 30 年 11 月）に名古屋連合音楽会の記述があり、第 74 号によると、明治 30 年に明治舘で第五回慈善音楽会が催され、八雲琴、雅楽、長唄、尺八、箏曲、金城軍楽隊による吹奏楽が演奏されている。

(23) ドヴォラヴィッチを招いてのこの演奏会について、明治 39 年 11 月創刊の『名古屋新聞』は、翌年の 2 月 27 日のオランダのヴァイオリン奏者ヘンリーエット・マーケンスの演奏会記事の中で「昨秋ズボラウィッチ氏の率いる宮内省の楽師来りて名古屋人士に耳新しきオーケストラを聴かせてから未だ半歳ならざるに…」と述べている。

(24) 井上さつき『日本のヴァイオリン王』、108 頁。

引用文献

『新愛知』（『新愛知縮刷版オンデマンド版』双光エシックス、2013 年）
『名古屋新聞』（『名古屋新聞縮刷版オンデマンド版』双光エシックス、2011 年）
『音楽雑誌』（音楽雑誌社、1-58 号、共益商社書店、59-60 号）：復刻版（大空社、1995 年）
名古屋市役所『名古屋市史　風俗編』（名古屋市、1915 年）
新修名古屋市史編集委員会『新修名古屋市史第五巻』（名古屋市、2000 年）
新修名古屋市史編集委員会『新修名古屋市史第十巻　年表・索引』（名古屋市、2001 年）
名古屋教育史編集委員会『名古屋教育史Ⅰ　近代教育の成立と展開〈明治期～大正中期〉』（名古屋市教育委員会、2015 年）
塚原康子『19 世紀における西洋音楽の受容』（多賀出版、1993 年）
東京音楽大学創立百年記念誌刊行委員会編『音楽教育の礎―鈴木米次郎と東洋音楽学校』（春秋社、2007 年）
飯塚恵理人『近代能楽史の研究―東海地域を中心に』（大河書房、2009 年）
井上さつき『日本のヴァイオリン王―鈴木政吉の生涯と幻の名器』（中央公論出版社、2014 年）
竹中享『明治のワーグナー・ブーム―近代日本の音楽移転』（中央公論新社、2016 年）
小沢優子「明治 40 年代の名古屋の洋楽受容―『名古屋新聞』の奏楽記事を中心に―」『愛知県立芸術大学紀要 No.42』（2013 年）